

令和元年6月2日現在

機関番号：25406

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2018

課題番号：15K12887

研究課題名（和文）日中対照に基づく感動詞の理論的基盤構築のための調査研究

研究課題名（英文）Survey and Research for Establishing a Theoretical Foundation of Interjections Based on Japan-China Contrast

研究代表者

友定 賢治（TOMOSADA, KENJI）

県立広島大学・保健福祉学部（三原キャンパス）・名誉教授

研究者番号：80101632

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：研究実績の一つめは、日本・中国での自然談話の収録である。日本は、東京（共通語）・広島・出雲・仙台の各地で収集し、中国では北京（普通語）・天津・大連で収録した。二つめは、論文と学会発表で、あいづちが、天津方言では日本語と同様に頻繁であること。対称詞の感動詞化が西日本で盛んであること、日中の呼びかけの用法差、感動詞の変化研究の課題などを明らかにした。三つめは、感動詞ワークショップの開催である。100人ばかりが参加して、感動詞に関する諸問題が熱心に議論された。四つめは、そのワークショップの発表をもとにした『感動詞研究の展開』（仮称）という論文集出版で、2019年度内には刊行予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで研究対象となることが少なかった感動詞について、方言も含めた日中の対照を中心とした研究によって、感動詞の理論、用法記述、中国語その他と日本語の対照研究、日本での方言差、日本語教育での感動詞の問題など、今後の感動詞研究の指針となる結果が得られ、これまで研究が進んでいなかった感動詞に、確実に研究者の関心が高まってきたものと思われる。さらに、この研究成果をまとめた論文集の出版も決まっており、今後も、感動詞の研究がより広く展開していくことに資すると考える。

研究成果の概要（英文）：Conducting this research enables us to notice four important achievements. First achievement lays in the gathering of natural speeches recording in Japan and China. We successfully recorded various dialects of Japanese language in several locations in Japan and China. Second achievement of the research lays in the presentations in dissertations and conferences of the following cases: 1) The interjections in Tianjin dialect is as frequent as it is in Japanese language. 2) The difference in the usage rules of addressing someone. Third achievement of the research is the ability to hold interjections workshops. Around 100 people participated in this conference. The participants were able to enthusiastically discuss various problems regarding interjections. Forth achievement of the research is the ability to publish an essay based on the successful workshop. The essay will be published in a journal called 『感動詞研究の展開』。

研究分野：日本語学

キーワード：感動詞 日中対照 あいづち フィラー 呼びかけ 談話

## 1. 研究開始当初の背景

感動詞の研究は、田窪行則・金水敏・定延利之・森山卓郎らによって、談話管理理論や情報科学理論に基づいた整理が始まり、ようやく本格的な研究が始まった。ただ、内省や作例によっているものが多く、実際の言語使用現場での生々しい様相を十分には捉えきれていなかった。そこで、基盤研究(B)「現代日本語感動詞の実証的・理論的基盤構築のための調査研究」(課題番号代表友定賢治)では、方言や自然会話に基づいた研究を精力的にすすめてつづめるメンバーが集まり、感動詞の地域性について明らかにするとともに、認知科学的・社会科学的なアプローチ分析を統合して、日本語音声コミュニケーションにおける感動詞のはたらきについて明らかにしようとした。成果は友定編(近刊)『感動詞の言語学』(ひつじ書房)にまとめた。その結果、(1) 個々の感動詞の記述、(2) 感動詞の地理的変異についての解明、(3) 感動詞の文法論的・会話分析的な研究は大きく進めることができたが、(4) 感動詞の言語学的な位置づけについて、目的を達成するためには、他言語との対照が必須であることが明確になった。感動詞の対照研究は、フィラーとかあいづちについては、いくらかの成果があるものの、感動詞の体系的な対照やそれぞれの言語での自然談話に基づく対照などは行われていない。

## 2. 研究の目的

本研究は、大きく3つの目的を設定し、これらを総合することで、感動詞の言語的性格を理論化することを目指した。【目的1】日本・中国の複数地点での自然談話を収録する。対照研究の基盤である資料について、年齢層・性別等を一定にした自然談話を、共通語・普通語だけでなく、方言談話資料も含めて集めることとした。【目的2】談話資料の分析を通じて相違点と共通点を明らかにする。統制された日中両国の自然談話資料の分析を通じて、感動詞の性格の一般化をめざす。【目的3】これらの作業を統合し、欧米での研究とも連携して、感動詞について一般化できる理論を提示する。

## 3. 研究の方法

【目的1】については、日本・中国とも、東京(共通語)・北京(普通語)をはじめ、各地の方言談話を収録する。条件としては、各地生え抜き話者同士の打ち解けた場面とし、音声・ビデオの両方で収録した。【目的2】収録した談話資料で分析が可能なテーマとして、あいづち・フィラー・呼びかけを特に取り上げ分析した。その際、日中の比較対照だけでなく、日本・中国それぞれの方言間の対照も行った。【目的3】として、感動詞の理論化を目標とし、日本・中国・その他の言語での感動詞の先行研究の文献目録の作成からはじめ、収録したデータの分析を加えたものから考察する。

## 4. 研究成果

研究実績の一つめは、日本・中国での自然談話の収録である。日本は、東京(共通語)・広島・出雲・仙台の各地で収集し、中国では北京(普通語)・天津・大連で収録した。二つめは、論文と学会発表で、あいづちが、天津方言では日本語と同様に頻繁であること。対称詞の感動詞化が西日本で盛んであること、日中の呼びかけの用法差、感動詞の変化研究の課題などを明らかにした。三つめは、感動詞ワークショップの開催である。100人ばかりが参加して、感動詞に関する諸問題が熱心に議論された。四つめは、そのワークショップの

発表をもとにした『感動詞研究の展開』(仮称)という論文集出版で,2019年度内には刊行予定である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

Tomosada Kenji : The Japanese language and character particles:As seen in dialect  
Acta Linguistica Asiastica 5-2,査読無し,2015, pp.51-60

羅米良,肖「女」+「亭」「女」+「亭」,友定賢治,:日中対照による呼びかけ感動詞研究の  
準備的考察,『連語論研究』,査読無し,2018, pp.67-76,

友定賢治:対称詞の間投用法と文末用法の西日本分布について,小林隆編『感性の方言学』,  
ひつじ書房,査読無し,2018,pp.163-186

友定賢治感動詞の変化研究とその課題,日本方言研究会編『方言の研究5』,査読無し,2019  
予定, ページ未定

〔学会発表〕(計 1 件)

羅米良,肖「女」+「亭」「女」+「亭」,友定賢治(2018), 日中対照による呼びかけ感動詞  
研究の準備的考察, 大連大学日中韓語言文化研究フォーラム,2016年 大連大学

〔図書〕(計 1 件)

・『感動詞研究の展開』,東京:ひつじ書房,2019年度内刊行予定

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：定延利之， 有元光彦， 金田純平

ローマ字氏名：Sadanobu Toshiyuki, Arimoto Mitsuhiko, Kaneda Junpei

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。